

**CITIZEN
OF
THE YEAR
2013**

社会に感動を与える人々を応援します



TOY工房どんぐりによせて

最近、IT技術などハイテク産業がもてはやされているが、このように身近な素材で、楽しむ工夫をされている。しかも、楽しむだけでなくそれを使うことによって、クリエイティビティが伸びるといふ素晴らしいアイデアと努力に乾杯。

武田 双雲



手づくりの布おもちゃで 子どもたちに次の一歩を

TOY工房どんぐり / といこうぼうどんぐり 東京都世田谷区



人々に感動を与える、ひたむきで心温まる活動を
私たちはこれからも応援してまいります



シチズンホールディングス株式会社
代表取締役社長
戸倉 敏夫

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、毎年「感動」をキーワードに選考を行い、無名のよき市民の活動を称え表彰しています。シチズン創立60周年に際し、社名の「CITIZEN(市民)」にふさわしい記念事業をとの思いから1990年に創設され、今年で24回目を迎えました。毎年、受賞者の方々の人を思いやる優しさ、ひたむきで心温まる活動に触れるたび、多くの元気や勇気を頂いています。皆さまは、夢をあきらめない強い思いや、人々の喜ぶ顔が見たいという、一途な熱い思いと温かい眼差しで社会と向き合い活動をされています。その地道な活動の一つひとつが、大きな力となって社会を支えているのを実感し、表彰させていただくことに私たちは喜びと誇りを感じています。シチズングループは、「市民に愛され、市民に貢献する」という企業理念のもと、これからも皆さまのよき活動を応援してまいります。

シチズン・オブ・ザ・イヤー

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰する制度です。毎年、1～12月までに発行された主要日刊紙のなかから、賞にふさわしいと思われる記事を選び、主要新聞社の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。これまで、日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

2013年度 選考委員会

- 委員長 山根 基世 (元NHKアナウンス室長)
- 委員 香山 リカ (精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授)
- 齋藤 浩 (産経新聞社 社会部長)
- 斉藤 准 (日本経済新聞社 編集局次長兼社会部長)
- 藤田 和之 (読売新聞社 社会部長)
- 益子 直美 (スポーツコメンテーター)
- 森北 喜久馬 (朝日新聞社 社会部長)
- 山本 修司 (毎日新聞社 社会部長)

敬称略・五十音順 ※役職は、2014年1月現在



● TOY工房どんぐり

手づくりの布おもちゃで
子どもたちに次の一歩を ————— 3



● チャイルズエンジェル

市民の力で街に麒麟を!
情熱と行動力で夢を現実に ————— 7



● 上中別府 チエさん

生涯現役を貫く生き方が
皆を勇気づけ元気づける ————— 11

対談 ————— 15

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長 山根 基世さん
&
2013年度受賞者 上中別府 チエさん

歴代受賞者一覧 ————— 18

各受賞者へ贈る書

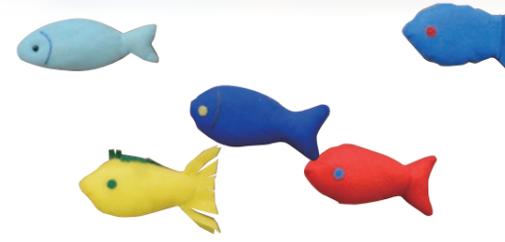


書道家
武田双雲

昭和50年熊本生まれ。3歳から母である書家・武田双葉(そうよう)に書を叩き込まれる。東京理科大学理工学部卒、NTTに約3年勤めた後、2001年1月より書道家として湘南で創作活動をはじめ。代表作品に「人生」「戦」「種」「波」などがある。

CITIZEN OF THE YEAR 2013

TOY工房どんぐり
TOY WORKSHOP DONGURI



一人ひとりの伸びる力を 布のやさしさで育てたい

「でも、本当にほしいのは、こういうおもちゃじゃないんです」
河村さんたちは、一人の先生の言葉にはっとしました。
そのひと言から、30年に及ぶ障害児のための布おもちゃづくりが始まったのです。



お母さんの 手づくりおもちゃが TOY工房どんぐりの原点

1983年、世田谷ボランティア協会の代田ボランティアビューロー事業が始まったとき、手仕事の好きな女性が裁縫道具を持ち寄り、見よう見まねで寄付された布などを使っておもちゃを作ったのが「TOY工房どんぐり」の出発点です。作ったおもちゃは、近くの養護学校や小学校の特別支援学級などに寄贈していました。

そんなある日、タペストリーにしたクリスマスツリーを持つていった学校で、一人の先生から悩みを打ち明けられました。「本当にほしいのは、こういうおもちゃじゃないんです。障害を持つ子どもたちそれぞれに合った教育に使えるおもちゃなんです」

「そうか…。それなら自分たちでオリジナルのおもちゃを作ってみたいはどうだろう」。こうして、本格的な障害児向けの布おもちゃづくりが始まったのです。
ちょうどその頃、障害を持つ子どものお母さんが活動に参加し、自分の子どものためにおもちゃ



デザイン、色づかい、形すべてに気を配り、どこを縫ったか分からない見事な糸始末は、既製品など遠く及ばないほどです

一人ひとりの 障害に合わせ おもちゃづくりを30年



一人ひとりの障害に合わせ おもちゃづくりを30年

材料費をもらおう決断が活動発展の契機に
1989年、大きな転機が訪れます。福祉関係のコンペで「さかなつり」が優秀賞を受賞し、注文が増え、助成金や寄付された材料だけでは活動の存続が難しくなってきたのです。
「材料費をもらってはという声に、ボランティアなので嫌だとい

方もいて議論を重ねました。最終的には、良いものを作るには必要だということで決断しました」と、代表の河村さんは当時を振り返ります。
結果的には、この判断がTOY工房どんぐりの活動が今日まで続く大きな要因となりました。材料費をもらうことで、今まで以上に責任感が生まれ、少しでも良いものを作ろうという気持ちが強く、依頼する側も意見や要望が伝えやすくなったのです。
こうして作られた布おもちゃは、障害を持つ子どもたちの伸びる力を引き出しました。「働くくるま」の歌に合わせて布おもちゃを作ったんです。そうしたら、普段言葉が発することが苦手な子どもたちが、その歌を一生懸命歌いながら自分の好きなクルマを手取るんです。また、重い障害のある子が、電車が大好きなんですけど、寝るときには私たちが作った電車のおもちゃを握りしめ

先生の声や自分たちのアイデアで進化してきた「さかなつり」のさかな



三つ折りの中にお話を凝縮させている布絵本

チャイルズエンジェルによせて
子供たちの夢を叶えるために、そこ
まで動けるのか、麒麟の首のよう
に、夢も知恵も伸びていく物語に
感動。麒麟を通して、様々なドラマ
が生まれ、その涙ぐましいプロセス
こそ、子供たちにとって、素晴らしい
体験として体中に染み渡ったのだら
う。夢を叶えることも大切だが、それ
までの情熱やみんなで協力しあうこ
と、貢献などあらゆる知恵がつま
まっている活動だと思う。

武田 双雲



市民の力で街に麒麟を! 情熱と行動力で夢を現実に

チャイルズエンジェル / 北海道釧路市



縫製、デザイン、ミシンなど、
メンバーそれぞれの得意分
野が活かされてひとつのおも
ちゃが完成します



「たごさん」「かにさん」が
心電図検査の布さを和らげます

子どもたちの笑顔を思い 一つひとつ丁寧に

心臓検診を怖がる子どもたちの
ため、楽しく練習ができるよう作
られた「しんぞうけんしん」もそ
んな一つです。心電図の胸に貼る
吸盤を「たごさん」、手足につける
クリップを「かにさん」に見立て、
「たごちゅちゅつ」と歌を歌いな
がら練習します。この練習で多く
の子どもが落ち着いて検診できる
ようになったそうです。

信号の色が分かるように作っ
た布おもちゃは、赤信号で止まる
ことを教え、子どもたちの命を守
ります。服の着方が身に付く「身
支度エプロン」は、「子どもにもカッ
コいいジーンパンをはかせたい」とい
うお母さんの願いから生まれます

活動の原動力について河村さん
は、「子どもたちの喜んで遊んで
いる姿や笑顔に尽きます。すべて
の苦労が吹き飛びます。感動が
あるし、そこからエネルギーをも
らって、また次のおもちゃを作る
うという力になります」と話しま
す。そして、自分たちの作った布
おもちゃを使い、ほんのささやか
なことでもいいので、少しずつ新
しいことができるようになっても
らいたいというのが、メンバーの共
通した想いです。

「子どもたちの命を守りたい、
そして自立を支援したい」。いつも
その想いを込めてデザインしてい
ます。



海外の子どもたちも「さかなつり」に夢中(ベトナム)



どんな遊び方をしても壊れにくい、安全な布おもちゃ



興味や驚きが子どもたちの伸びる力を引き出します



支えてくれる人たちと
メンバー同士の信頼が力に

TOY工房どんぐりでは、布お
もちゃをもっと多くの人に知って
もらえるよう、展示会を開いた
り、講習会に作品を提供したりし
ています。また、おもちゃはベト
ナムやコソボなど海外にも寄贈さ
れています。

常に現場の声に耳を傾け、アイ
デアを出し合い、時には意見の違い
を徹底して話し合って頑張ってきた
TOY工房どんぐりの皆さん。

今後は、より重度の障害がある子
どもたちでも楽しめるおもちゃ
や、成人の障害者が楽しめる娯楽
ツールの提供も検討しています。

今回のシチズン・オブ・ザ・イヤー
受賞を、現場の先生や、製作を
手伝ってくれる福祉作業所の人
たち、無償で材料をカットしてく
れている業者の方、おもちゃの貸
し出しをしているボランティアグ
ループなど、活動を支えてくれ
ている方々が、とても喜んでくれ
たそうです。

「これまで支えてくれた人に
とって、TOY工房どんぐりのおも
ちゃづくりに関わった時間が、充
実した時間だと思ってもらえたら
うれしい。私たちはこれからも、子
どもたちの笑顔を思い浮かべなが
ら、ひとつずつ丁寧に布おもちゃを
作っていきます」と、メンバー全員
気持ちを新たにしています。

お話を伺った、代表の河村豊子さん(左)と、デザイン担当の穂刈弓さん

情熱と行動力が生んだ
サンディエゴの快挙

「目標金額は5000万円、活動期間は2013年3月末まで」と決め、チャイルズエンジェルは募金活動の準備に取り掛かりました。地元のデザイナー木島さんがボランティアでポスターを作ってくれた一方、札幌国税局に申請し、募金しやすい寄付金控除の対



市のイベントでも多くの市民が募金に協力してくれました

象団体にもなりました。こうして2012年5月、キリンを子どもたちにプレゼントするための募金活動がスタートしたのです。始まってみると、市民の反響と協力は予想をはるかに超えるものでした。事務局の電話は募金の問い合わせや激励で鳴り続け、活動は市民、企業、団体と、子どもから大人まで大きなうねりとなって釧路中に広がっていったのです。

「キリン募金に、ご協力お願いしますーす!」。最初は声が出なかつたエンジェルたちも、街頭やイベントで募金活動を重ねるうちに声が大きくなりました。そして、握りしめたお小遣いを募金する子どもたちの姿に、エンジェルたち自身も感動をもったのです。



幼稚園児や小学校の児童たちも、かわいい声でキリン募金を呼びかけました



大きなうねりとなった「キリン募金」支援の輪



募金開始の日、チャイルズエンジェルは、集まった報道陣の前にキリン購入への熱い想いを伝えました

チャイルズエンジェル
CHILD'S ANGEL

ほら、キリンさんは、みんなが連れて来たんだよ!



「子どもたちの夢をかなえ、命の貴さを伝えるためにも絶対キリンを贈らなきゃ」
主婦たちの熱い想いと行動力から始まった募金活動は、大きなうねりとなって釧路市全体に広がりました。やがて活動は海を越え、世界最大級のサンディエゴ動物園をも動かし、夢の実現へと加速していったのです。

「どうして、この動物園にはキリンがないの?」。始まりは、そんな子どもの一言でした。
釧路市動物園では、2008年にゾウのナナ、翌年にキリンのキリコと子どもたちに人気の動物が相次いで亡くなってしまいました。ある日、佐藤さんが主婦仲間のお茶の席で寂しくなった動物園の話をする、かつて子どもたちを動物園に連れて行って喜ばせたことに皆が思いを馳せ、「だったら、私たちがお金を出し合ってキリンを寄贈しましょうよ」と購入を思い立ちました。
さっそく、釧路市動物園の山口園長(当時)に相談すると、園長から聞かされたのは想像もしなかつたキリン購入の難しさでした。それは、「国内では繁殖のための貸し借りが主で、キリンのいない釧路には来る可能性がほとんどないこと。仮に海外から買うにしても

「子どもたちの夢をかなえ、命の貴さを伝えるためにも絶対にキリンに会わせたい」。その思いはついに結論に達します。「募金を集めたらどう? 子どもたちのためのキリン募金。釧路中が協力してくれるんじゃない!」
こうして、坂本さんを代表に、地元主婦20人による市民団体「チャイルズエンジェル」が誕生したのです。
園長の言葉に、皆さんの心は前にも増して熱くなりました。「子どもたちの夢をかなえ、命の貴さを伝えるためにも絶対にキリンに会わせたい」。その思いはついに結論に達します。「募金を集めたらどう? 子どもたちのためのキリン募金。釧路中が協力してくれるんじゃない!」
こうして、坂本さんを代表に、地元主婦20人による市民団体「チャイルズエンジェル」が誕生したのです。



2009年、キリコが亡くなったときの献花台

上中別府 チエさんによせて

高齢化社会という言葉はネガティブにとらわれがちだが、チエさんの常識をいとも簡単にやぶっていくエネルギー溢るな野球活動が、日本の未来を励ましているように思えた。チエさんも野球や周りのスポーツマンたちに励まされることだろう。そして、またそれをエネルギーにがんばる姿が、周りを励ましていく。僕も励まされた一人だ。日本の未来を明るくしてくれてありがとう。

武田 双雲



生涯現役を貫く生き方が 皆を勇気づけ元気づける

上中別府 チエさん / かななかべつ ちえ 1930 (昭和5) 年生まれ。神奈川県川崎市在住



わずか5カ月で募金は3000万円を突破するものの、動物商を介してアメリカのサンディエゴ動物園からキリンを購入する話は一向に進まず、焦りも募っていました。そこでエンジェルたちは、自分たちで札幌の米国総領事館を訪ね、大使館を介してサンディエゴ動物園へキリン購入の面会を申し入れたのです。

9月、サンディエゴ動物園から「来園を歓迎する」という待望の連絡が入りました。交渉の準備



サンディエゴ動物園からキリン譲渡の快諾を得たことで活動は大きく前進しました

夢を信じ走り続けた 20人のエンジェルたち

とともに、子どもたちが描いたキリンの絵を持っていくと、絵画展も開きました。11月、熱い想いを携え、エンジェルたちは自費でサンディエゴ動物園へと出発したのです。

サンディエゴ動物園のCEO(最高経営責任者)たちを前に、坂本さんが募金活動が大きなムーブメントとなっていることを伝え、釧路市民がどんなにキリンを待ちわびているか熱く語ると、CEOは大きく頷き、「感銘を受けました。皆さんの要望に沿えるよう努力しましょう」と、その場で確約してくれたのです。



車体にキリンを描いたバスも登場し、活動を盛り上げました

人気を集めたキリンパン。売上の一部が募金に寄付されました

部屋から出て手を取り合うエン

ジェルたちの目には、皆、光るものがありました。

感動が国内の動物園を動かし 念願のキリン購入へ

世界最大級の動物園を動かしたこの快挙は新聞報道され、釧路市民が心をひとつに奮闘している姿を、日本中の動物園に知らせました。感動はすぐに新たな動きとなって表れます。おびひろ動物園で生まれた雄のキリン「スカイ」を、所有権を持つ盛岡市動物公園が釧路に譲渡してもいいと申し出たのです。

「本当ですか!」。その知らせに、エンジェルたちは歓喜に包まれました。子どもたちがどんなに喜ぶことでしょう。エンジェルたちは、気持ちも新たに募金活動に没頭し、総額は5000万円に近づいていきました。すでに、募金箱設置場所は約



貴重な経験を積んだサンディエゴ動物園での獣医と飼育係の研修



募金の一部で設置された、寒い冬でもキリンが間近に見られる観覧席

600カ所を訪れた企業は約700社に上っていました。そして、募金活動の最後となるバザーが2013年3月31日に行われたのです。すべての品物が売り切れた瞬間、募金はいよいよ5000万円を突破しました。エンジェルたちは抱き合い、市民の協力に感謝して涙を流しました。

募金でキリン購入を果たすと、チャイルズエンジェルは、惜しまれながらも解散したのです。募金終了から半年後の10月12日、釧路市動物園は普段の2倍近い2400人もの来場者でにぎわっていました。1歳のアメ

メキリンのオス「スカイ」くんお披露目の日を迎えたのです。「スカイ」くんの登場に、



「スカイ」くん「コハネ」ちゃんの登場に子どもたちは大喜び

キリン舎の周りは子どもたちや市民の歓声と笑顔があふれ、傍らにはそれを優しく見守るエンジェルたちの姿がありました。募金の残りは、キリン舎の整備に使われたあと動物園に寄付され、一部は獣医と飼育係をサンディエゴ動物園に短期留学させ、人づくりに活かされました。そして2014年、「スカイ」くん、待望のパートナー「コハネ」ちゃんが、東京の羽村市動物公園からやってきました。6月1日のお披露目イベントでは、子どもたちの元気な呼びかけに添えて2頭が仲良く登場し、大人も子どもも2倍の喜びに笑顔がはじけました。「この活動は、私たちに託しても宝物です」。そう話すエンジェルたち。心をひとつにして夢を実現させた釧路市民の感動の物語は、いつまでも皆の心に残っていくことでしょう。

写真提供/釧路新聞社



伝令のチエさんがマウンドに近づくと、内野陣の表情が一気に和らぎ、一斉に帽子を取ってチエさんを迎えました



ご主人とは旅行で日本全国を巡りました

40年以上心にしまっていた英語への想い
チエさんは、1930年（昭和5年）、鹿児島県の農家に7人兄弟の四女として生まれました。日本が戦争へ突き進む時代で、好きなそろばんや習字の時間も消火訓練のバケツリレーなどになり、進学などとてもできない状況でした。
チエさんは24歳のとき結婚。一男一女に恵まれ、その後、夫の転勤で神奈川県川崎市に移り住みました。2004年、50年間連れ添ったご主人が亡くなり、チエさんの心にぽっかりと穴が開きました。お線香を上げてお経を読む毎日。見かねた長女の「家に閉じこもってばかりじゃいけない」という一言が本来のチエさんに戻してくれました。「そうだ、英語の勉強をしよう」

中学の勉強は、喜びと驚きの連続でしたが、英語が週に2回と物足りなかったチエさんは、「1時

きつとチームが成長すると先生が野球部にスカウト

かつて、中学校に入った長女が英語を勉強しているのを見た時、チエさんは衝撃を受けました。それまで国語や算数はある程度教えてあげられたのに、英語はまったく分からない。娘に教えてあげることができない寂しさ、何も理解できない悔しさが入り混じり、その翌日、家族に内緒で参考書を買ったことがありました。しかし、独学ではやはり無理で、そのときチエさんは英語の参考書も学びたい気持ちも心の中にしまったのです。
そんなとき、義務教育を9年間受けていない人は、夜間中学に入ると区役所で教えられました。早速、川崎市立西中原中学校の夜間学級に電話をすると、大丈夫という返事。すぐに学校に行き、その場で入学を決めたのです。76歳の春でした。



かつて、中学校に入った長女が英語を勉強しているのを見た時、チエさんは衝撃を受けました。それまで国語や算数はある程度教えてあげられたのに、英語はまったく分からない。娘に教えてあげることができない寂しさ、何も理解できない悔しさが入り混じり、その翌日、家族に内緒で参考書を買ったことがありました。しかし、独学ではやはり無理で、そのときチエさんは英語の参考書も学びたい気持ちも心の中にしまったのです。



CITIZEN OF THE YEAR 2013

上中別府 チエ
CHIE KAMINAKABEPPU



学べる喜びと すべての出会いに感謝して

「私でも、中学校に入れますか?」

中学校の夜間学級に電話をした上中別府チエさんは、「大丈夫ですよ」という返事に、嬉しさを抑えきれませんでした。すぐに先生に会いに行き入学を決めたのは、76歳の春のことでした。



野球部の顧問であり担任でもあった恩師の中島克己先生と



日本女子プロ野球の始球式では日ごろの練習の成果を發揮

皆をリラックスさせた 最高の伝令役

2013年6月23日、全国高等学校定時制通信制軟式野球大会の神奈川県予選決勝。息詰まる投手戦が続く6回裏、一死満塁のピンチを迎えた高津高校のベンチから、一人の選手が伝令に飛び出しました。

スタンドから湧き上がる大きな歓声と拍手。この選手こそ、83歳の女子高校生球児、上中別府チエさんでした。一礼してマウンドに近づくと、気付いた選手全員の表情が一気に和らぎ、一斉に帽子を取って笑顔でチエさんを迎えました。

「みんな普段の顔じゃなくなっていたんです。それが、私に気付いたら急に表情が柔らかくなって、ああ良かった！自分も役に立てたんだと思いました。『落ち着いて』と言ってベンチに戻ると、中島先生から『お疲れさま。みんなリラックスしましたね』と言葉をいただきました」

もつと学びたいと 76歳で中学の夜間学級へ



チームメイトが熱心に投球を指導

チエさんを野球部に誘ったのは、部の顧問で担任でもあった中島克己先生でした。何事にも努力を惜みず、誰からも慕われる姿を見て、「チエさんが入れば、チームはもつと成長する」と思ったからです。
その日、高津高校定時制野球部は惜しくも敗れ、全国大会出場は果たせませんでした。しかし、試合後チエさんは悔し涙を流すチームメイトに「敗れはしたけれど、こんないいチームはない、日本一だと思おう。就職するにしても進学するにしても、この経験を糧に頑張ってほしい」と励ましました。

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長

2013年度受賞者

山根 基世さん & 上中別府 チエさん

誠実な生き方から学びたい 誰もが慕う素晴らしい人間力



MOTOYO YAMANE

山根 基世さん

NHKアナウンサーとして数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンサー室長に就任。NHK退職後、子どもの言葉や育てる活動に取り組んでいる

CHIE KAMINAKABEPPU

上中別府 チエさん

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長の山根基世さんが、
2013年度受賞者の上中別府チエさんを迎え、
誰からも慕われる素晴らしい人柄の原点をお聞きしました。

山根 チエさんは鹿児島島の農家に、7人兄弟の四女としてお生まれになりました。そんななかでお父さまの生き方に、ずいぶん影響を受けられたそうですね。チエ 父親は、起きる時間も寝る時間も規則正しく、仕事でも日々の生活でも何事にも真剣に取り組む人でした。今でも兄弟が集まると父親の話になるのですが、毎日、子どもたちの筆箱を持ってきて、草刈鎌で鉛筆をきれいに削ってくれたのを見ながら覚えています。また小学校の頃は、学校を休んで農家の手伝いをする子もたくさんいましたが、父親は一度も休めと言ったことがありませんでした。山根 やはり、お父さまの心の中には、学ぶことへの尊敬の思いがあったのでしょうね。お父さまから言われた言葉で覚えていらっしゃることはありますか。チエ 小学校2年生のときに

きびしい父親から学んだ
誠実で真摯な生き方

写真提供／高津高等学校 定時制



小さい頃から習字が好きで、高津高校では書道部に在籍。これから水墨画にも挑戦します

野球部に入ったチエさんは、球拾いをしたりグラウンドをならす「トンボ」を引張ったりと、チームの一員として頑張りました。また、チエさんが差し入れする手づくりのパンやおにぎりは、皆のお腹も心も満たしたのです。翌年のホワイトデー、チームメイトはチエさんの手になじむ小さめの赤いクラブをプレゼントしました。チエ



球技大会など学校行事にも積極的に参加



自筆の看板を中心に、ともに卒業式を迎えた野球部員と



孫より若い同級生と、勉強を教え合うことも

中学校の卒業時、「もっと勉強がしたい」と79歳で川崎市立高津高校定時制を受験し合格。定時制には、いじめにあつたり不登校だつたりと、さまざまな事情を持つ生徒がいましたが、誰にでも自然体で接するチエさんは、すぐに皆から慕われるようになりました。華道部と書道部に入り、勉強では予習復習を欠かしません。そんな、学校一の努力家のチエさんを中島先生が野球部に誘ったのは2年生が終わる頃でした。「私に

「生涯現役」を胸に 新たなチャレンジ

さるわけがない」と、最初は笑って断りましたが、ことあることに先生は声をかけてきました。熱心に話す先生に、チエさんの心は少しずつ傾いていきました。そして、3年生の秋、プロ野球のドラフト会議と同じ日、チエさんは先生や野球部員から「1位指名」され、入部を決めたのです。



チエさんの「ドラフト1位指名」を伝える中島先生手づくりの新聞

スタンドに掲げられた みんなからの感謝の言葉

エさんはそのクラブを毎日持って帰り、柔らかなるよう布団の下に敷いて寝たのです。

2013年の全国大会神奈川県予選、一緒に頑張ってきた全員を試合に出してあげたいと、中島先生は大量リードした1回戦の5回裏、チエさんにレフトの守備につくよう言いました。

「みんなが点を取って出してくれたことを思い、責任を感じていました。それで、こんなボールが飛んで来たらこうしようとは通りも考えて守っていました」。結局、ボールは来ませんでした。次の日学校でチエさんは「100歳まで生きるつもりだったけど、昨日ドキドキして3歳寿命が縮みました」と先生を大笑いさせました。

その夏、チエさんは日本女子プロ野球機構の依頼で大会の始球式を務めました。練習を重ね、当日マウンドに向かうチエさんに、応援に駆けつけた仲間や先生たちは「夢と希望と元気をありがとう」と書いた横断幕を掲げました。



日本女子プロ野球の始球式では、サプライズの横断幕が!

2014年3月1日、4年間通った高校卒業式の日、すっかり手になじんだ赤いクラブには、仲間からのお礼のメッセージがたくさん書き込まれました。

好きな言葉は「生涯現役」。卒業後は書道、水墨画、絵手紙、水泳と新たなチャレンジの日々が始まっています。



叱られたことは、はっきり覚えていません。何かの会に出品する絵を描くため、私ともう一人の女の子が、放課後残るよう先生から言われたのです。でも、私はその子がとても苦手だったので、残らずに帰ってきてしまったんです。それを兄弟から聞いた父親に、「先生の言うことを聞かないような子はうちの子じゃない」ときつく叱られました。

山根 先生の言うことを守ることも大事ですが、お父さまはチエさんのことを大切に思っていたからこそ、誠実ではない態度をいさめたかったのではないのでしょうか。でも、チエさんは小

さい頃から家の仕事をずいぶん手伝われたとか。

チエ 学校から帰ると、まず畑に行つて小さい弟を家に連れて帰り、それから井戸の水を手が震えるくらい何度も汲んでお風呂を沸かし、牛に餌をあげて、ご飯を炊いて。今思うと、毎日、よくやりましたね。一度、つくった味噌汁がともしよっぱいときがあつて、弟が「しよっぱい」と言ったら、父親は「しよっぱいときは、ちよとだけ飲めばいいんだ」と言だけ言いました。

山根 お父さまは人を責めたりしない人なんです。チエさんが本当によくやつてくれてい

山根 あの時代のいい家庭が目につくようです。そういうところで、お父さまや家族から学んだ人間関係のつくり方などが、今のチエさんの原点にあるのでしょうか。その後、24歳のときに結婚されました。

チエ 主人も鹿児島の人でしたが、転勤で川崎市にきました。娘が生まれた年に私は自分の母親を亡くしたので、主人の母親に孝行しました。自分たちが洗濯機や電気炊飯器を買ったときは、主人の実家にも送つてあげて、ずいぶん喜ばれました。

相手の言葉に耳を傾ければきつと心を開いてくれる

山根 チエさんの家庭も互いに家族思いで、夜間中学に入るときには、息子さんが贈り物をくださったそうです。

チエ 電子辞書をプレゼントしてくれました。一番いいものを選んでくれたそうです。娘は毎月のお給料から少しづつ鹿児島にいる祖母に仕送りしていま

た。主人が亡くなり落ちこんでいたときは、お嫁さんが息子にいろいろな食べ物を持たせてくれて、とてもうれしかったです。

山根 皆、日頃からチエさんがされているのを見て、いからなんでしょう。定時制高校に入られてからも、周りの人たちが慕われるのは、そうした気遣いがあるからじゃないでしょうか。チエ 話はよく聞いてあげましたね。若い人たちには、まず何でも聞いてあげることが大事だと思います。最初はね、「今、何時？」って時間を聞くだけでもいい。そうすると、つながりができて、話をするようになり、

話を聞いてあげるそこから人間関係も信頼も生まれるんです



山根 基世さん & 上中別府 チエさん

勉強だけでなく働くことで人間として生きる力が学べます

という思いがなくなりつつあります。お父さまのそういう態度は、チエさんのなかで人と接するときの基準になっているのかもしれない。

家庭のなかで身に付けた人間として生きる力

チエ 一番ほめられたときのことも良く覚えていて、6年生のとき朝礼で男の子と私の2人だけが「健康優良児」に選ばれて賞状とメダルをもらったのです。家に帰って帰ったら、「チエはいつも頑張っているから」と、口数の少ない父親がとてもほめてくれて、家の真ん中に賞状を貼ってくれました。私も勉強が好きで1日も学校を休まなかったけれど、戦争が激しくなつて、女学校に行かせてほしいとは、どうしても父親に言えなかったですね。

山根 今の私たちには、想像もできない時代だったんですね。小学校のときから一家のお母さん役をやつて、よく勉強してよく働いて。現代のお父さんお母



チームメートとの思い出の詰まったグラブは今も宝物です

さんは、子どもたちに対して、とにかく勉強さえすればいいと考えて、家事を手伝わせたりしないでしょ。それは、人間としての生きる力を学ぶ機会を奪っている気がするんです。

チエ 私などは、何でも体で覚えてやりましたね。それに、何をやるにしても「疲れた」と言ったこともなかった。実際、そんなに疲れたと思わなかったです。

山根 家族のなかで、いさかいなどはありませんでしたか。

チエ なかったですね。父親が大きな存在で中心にいましたから。その父が寝た後、毎晩、姉たちとみんなで学校のことなどを話すのが本当に楽しかったです。

山根 その子は、話しかけてくれる人がいなくなったんですよ。だから、先生に言わないことも、チエさんには話してくれたいですね。でも、チエさんだとみんなが素直に話せるのは、どうしてなのでしょう。ご自身はどう思いますか。

チエ よく分かりませんが、校門をくぐると歳を忘れて高校生に戻っているから、年上という自覚はありませんが、上からものを言わなかったというのがあります。相手もそういう態度は分かりません。ああ、この人は自分の話を聞いてくれるんだ」と思ったから、相手も話してくれようと思えます。そういう、男の子と別れ

ました」って、わざわざ教えに来ってくれた子もいました(笑)。

山根 今、子どもたちの話を聞いてくれる大人がいなくて、よ。本当にチエさんは、常に公平な価値観を持っていらして、大人も子どもも分け隔てなく誰の言葉にも耳を傾けています。やはり、小さい頃から日々の暮らしのなかで勉強だけでなくしつかり労働もし、誠実なご両親から生きていく姿勢を学ばれたからだと思います。これからも、私たちはその素晴らしい生き方からたくさん学ぶことができたいと思います。(敬称略)

日本の教育に必要な方です

今日は、人間力の素晴らしさを感じました。お会いしてすぐに、「ああ、うれしい」とおっしゃっていただき、こんなふう

山根基世

CITIZEN OF THE YEAR 1990-2013 受賞者の皆さん

1990年に創設され、これまで24回にわたり、市民に感動を与え、社会の発展に貢献した市民を顕彰してきたシチズン・オブ・ザ・イヤー。1990～2013年度の実績者の方々の素晴らしい活動をご紹介します。

2013 年度	TOY工房 どんぐり		障害児のためにオリジナルの布製おもちゃを作り続けて30年	2007 年度	西谷 勲さん		中学の夜間学級に50年間仕送りを続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る	2001 年度	伊藤 明彦さん		全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録	1995 年度	川田 龍平さん		命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身
	チャイルズ エンジェル		子ども達の夢をかなえたいと募金活動に奔走し、動物園にキリンを寄贈		車内清掃を続ける 高校生有志		JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い		大島 誠人さん		自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見		木村 三男さん		濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出
	上中別府 チエさん		高齢になってから夜間学校へ通い、勉学や課外活動に熱心に取り組む		谷垣 雄三さん		西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる		菅谷 昭さん		チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事		神戸商船大学 「白鷗寮」自治会		阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出勤
2012 年度	吉村 隆樹さん		障害者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供	2006 年度	川越 恒豊さん		刑務所内で放送される人気番組のDJを、27年間で300回以上続ける	2000 年度	近藤 原理・ 美佐子ご夫妻		障害者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた	1994 年度	星野 勇・ シズエ ご夫妻		足の不自由な方のために1,000足を越える靴を無償で修理・改良
	渡辺 玉枝さん		自然体の生き方で、2度のエベレスト女性最高峰登頂記録を達成		桑山 利子さん		スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす		ジュンコ アソシエーション		ベトナムの子どものための教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続		山下 秀治さん		知的障害者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築
	ルダシングワ 真美さん		紛争から立ち直ろうとするルワンダで、義肢提供や就労支援に献身		有城 覚さん		交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園		福祉工房あいち		障害者一人ひとりの障害度に合わせて、補助器具を考案し、製作		森本 春子さん		山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける
2011 年度	税所 篤快さん		バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む	2005 年度	堀田 健一さん		障害者一人ひとりのニーズに合わせて自転車を手作りで26年間作り続ける	1999 年度	セイヤー・ミドリさん 与那嶺 政江さん		在日米軍の父と地元女性の間生まれた子どものために、学校を開校	1993 年度	宇佐美 松恵さん		1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る
	竹内 龍幸さん		盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける		吉野 健治郎・ 勝 親子		親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける		トーマス・ カンザさん		修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2,000台		佐藤 昭夫さん		パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年
	笹原 留似子さん		東日本大震災の被災地で、復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける		日本スピンドル 製造株式会社 社員一同		JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施		録音グループ 「声」の皆さん		視覚障害者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年		8/6 竜ヶ水駅 災害救助活動 グループ		土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助
2010 年度	吉田 守松さん		半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける	2004 年度	新宮山彦 ぐる一ぶ		20年にわたって大峯奥駈道(熊野古道)の南半分約45キロの整備を続ける	1998 年度	岸本 康弘さん		ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む	1992 年度	清水 ルイズさん		日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている
	吉岡 諒人さん		夏休みの観察・実験を通じ、「アジゴクは排泄しない」という通説を覆す		兵庫県市町村 職員年金者連盟 豊岡支部 有志		水没していく観光バスの上で励まし合いながら全員が無事生還		金子 聡美さん 安田 志津さん		ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車で日本列島を縦断		千川 文次さん		絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元
	樋口 強さん		がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年		永井 利夫・ サヨコ ご夫妻		子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた		「福祉ネットワーク 池袋本町」の皆さん		電気ボットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る		「雄冬新聞」 歴代編集長		地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー
2009 年度	吉島 美樹子さん		ガン治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている	2003 年度	高松 由美子さん		長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援	1997 年度	葛木 みどりさん		南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現	1991 年度	チョン・ キューキョンさん		長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ
	多良 泉己さん		リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている		遠藤 マルシア アケミさん		お弁当の配達で緑で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校		高澤 圭介・ ナミ子ご夫妻		私財を投じてお年寄りや障害者が気軽に立ち寄れる家を完成		馬場 国敏さん		湾岸戦争で原油汚染にあぐく野鳥を救うため、国を動かし現地で活動
	茂 幸雄さん		福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う		曾我 健太さん		ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘		愛知県立東山 工業高等学校 車いす部		高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈		十円会		月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献
2008 年度	伊藤 和也さん (故人)		戦禍のアフガニスタンで緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる	2002 年度	谷村 基さん		励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける	1996 年度	小山 道夫さん		ベトナムの子どものため、職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設	1990 年度	加藤 幸男さん		バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助
	川崎個人 タクシー 協同組合		知的障害施設の子とたちと行く「タクシードライブ遠足」を30年間継続		武井 弥生さん		東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続		福岡 明夫さん		自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録		鈴木 陽子さん		過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動
	出水市立 荘中学校		ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀		アフガニスタン 義肢器具 支援の会		アフガニスタンの人々のために義肢を製作・進呈		古川 ヨシさん		障害者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師		林 鎌友さん		使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付

CITIZEN
Micro HumanTech



シチズンホールディングス株式会社

〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12
TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280

<http://www.citizen.co.jp/coy/index.html>

CITIZENはシチズンホールディングス株式会社の登録商標です。 2014年6月発行